



Title	アイヌ語の時点を表す時間副詞
Author(s)	馬, 長城; MA, Changcheng
Citation	北方言語研究, 14, 177-195
Issue Date	2024-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/110534
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92086
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_Ma.pdf



アイヌ語の時点を表す時間副詞*

馬 長 城

(北海道大学・煙台大学)

キーワード：アイヌ語、時間副詞、発話時点、不定時点、絶対的時点

1. はじめに

言語における時間の意味は、発話の文脈における直指中心の決定のもとで、文のなかの時間詞およびテンス・アスペクト・モダリティ要素によって発話においてあらわれる（嶋田 2021：17）。テンス・アスペクト・モダリティは文法的な要素で、時間詞は語彙的な要素とされる。時間詞は、個別言語によって呼び方が異なり、時間名詞や時間副詞、時間を表す語彙類と呼ばれるものが含まれる。つまり、時間詞は品詞論において固定された単一の品詞ではなく、名詞や副詞など複数の品詞にまたがることもあり、単一の語だけではなく複数の語彙が組み合わせられることもある¹。意味論的には、時間詞は時間軸上で事態を特定の位置に配置する役割や、事態の持続期間や進行を示す役割を担い、言語における時間表現において重要な機能を果たすと考えられる。

アイヌ語はテンスを有しない言語であり（田村 1997a：12）、形態論的範疇のアスペクトも存在しない（田村 2003：23）。アイヌ語における時間表現に関しては、佐藤（2008）が指摘するように、副詞の組み合わせによって過去、現在、未来を示すことが多く、副詞句が重要な役割を担っている（佐藤 2008：184-191）。しかしながら、アイヌ語の時間を表す副詞や副詞句に関する研究は少なく、服部（1964）と佐藤（2008）の記述的な研究を除き、ほとんど見当たらない。さらに、服部（1964）と佐藤（2008）の研究は語彙レベルでの意味の記述にとどまり、体系的な分析や記述はなされていない。

本稿ではアイヌ語における時間を表す語彙やその組み合わせを含む時間副詞を体系的に分析し、その文法的特性を明らかにする。日本語に関する研究成果を参考にすると、時間副詞はテンスとアスペクトの観点から時点を示すもの、事態の存続や起動の時間量および進展を表すもの、頻度を示すものに大別可能である（仁田 2002：201）。このうち、本稿では紙面の都合上、アイヌ語の時点を示す時間副詞のみに焦点を当て、その記述を試みる。

現在、アイヌ語のいずれの方言においても話者数は少なく、実地調査は極めて困難である。そこで、本稿では実地調査を行う代わりに、これまでに公開されているアイヌ語の言語資料

* 本稿は日本北方言語学会第6回大会（2023年11月18日）にて発表した後、さらに加筆修正を行ったものである。日本北方言語学会第6回大会にて発表した際、多くの方々より貴重な意見をいただいた。また、本稿の内容に関して2名の査読者の方々より貴重な助言をいただいた。この場を借りて感謝を申し上げたい。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費（研究活動スタート支援、課題名「中国語から見たアイヌ語のアスペクト形式の意味機能」、課題番号：22K19983、研究代表者：馬長城）の助成を受けたものである。

¹ 文において時間を表す成分はしばしば時間詞や時間副詞などと呼ばれることがあるが、いずれも語彙的な要素である。Comrie（1985：8）は事態を時間軸に位置付ける語彙的な要素を語彙項目（lexical items）と語彙的複合表現（lexically composite expressions）の二種類に分けている。本稿では便宜上、時間を示す名詞や副詞、そしてそれらが組み合わさった語彙を含め、広義に「時間詞」と呼ぶことにする。これはアイヌ語における「時間副詞」を指すのと同義で使用される。

を研究データとした。公開されているアイヌ語の資料のうち、沙流方言の資料は最も豊富であり、また、沙流方言と地理的に近い千歳方言のデータは筆者にとって入手が容易であるため、本稿は沙流方言と千歳方言のデータを合わせて議論を行う。

なお、アイヌ語のデータは雅語で語られる韻文物語と日常語で語られる散文物語に分けられる(知里 1973[1954]: 156)。本稿は記述的な立場から、散文物語のうち、自然会話に近い *uwepeker* (昔話)、*upaskuma* (伝説)、*ukoysoytak* (会話) の三種類を基礎データとして使用する。

2. 先行研究

2.1. アイヌ語の時点を表す時間副詞に関する先行研究

先述の通り、アイヌ語の時間副詞を含む時間表現に関する記述は、服部(1964)と佐藤(2008)の研究に主に見られる。

服部(1964)にはアイヌ語の十方言から選ばれた基本的な語彙や表現を集めた方言辞典が含まれており、その中には「*tané*²(今)」、「*ésir*(さっき)」、「*tanúkuran*(今夜)」、「*núman*(昨日)」など、時間に関する90の項目が挙げられている。しかし、服部(1964)は各方言の基礎語彙を列挙したもので、時間に関する項目は特定の意味や文法的基準ではなく、頻出度などを基にした編者の主観的な判断で選ばれたものである。服部(1964)は序説で、この方法が各方言の語彙体系の研究には不完全だと述べている(服部 1964: 25)。従って、アイヌ語沙流方言で時点を表す語彙を記述する場合、その方言に限定し、より体系的に考察することが求められる。

佐藤(2008)は時間副詞の項を設け、アイヌ語における時間の表現においてこれらが重要な役割を担っていると述べている。佐藤(2008)は「*tane*(今)」、「*tap*(今、つい今しがた)」、「*esir*(さっき)」、「*teta*(この間)」、「*teeta*(昔)」、「*tanto*(今日)」、「*numan*(昨日)」、「*nisatta*(明日)」という8つの時間を表す語彙について、例を用いながらその意味を記述しているが、アイヌ語の時間を表す副詞全般を網羅している訳ではない。従って、アイヌ語の時間副詞を網羅的に記述する必要性がある。

服部(1964)と佐藤(2008)以外にも、田村(1997a)や中川(2013)がアイヌ語の時間副詞に触れてはいるものの、詳細な記述はされていない。すなわち、アイヌ語における時間副詞の使用に関する研究は、語彙レベルでの記述はあるものの、その体系的な分類や文法的な機能に関する分析は未だ不十分である。本稿はアイヌ語の時間を表す副詞を体系的に記述し、文中での文法的な役割を明確にすることを目的とする。

2.2. 日本語の時点を表す時間副詞に関する先行研究

2.2.1. 工藤(1995)

工藤(1995: 177)は日本語のテンス・アスペクト体系をテキストとの関連で網羅的に記述しており、その中でテンポラリティーという概念を提唱し、以下のように定義している。

² *tané* の「e」の上に現れる「'」はアイヌ語学におけるアクセント記号である。アクセント記号がある音節は相対的に高く発音される。

文によってある出来事を伝えようとする場合、その出来事の成立時間をなんらかのかたちで指示する必要が生じるが、この文レベルの〈時間的位置づけの仕方の相違〉に関する意味・機能的カテゴリーを、〈テンポラリティー〉とよんでおこう。

日本語では、テンポラリティーを示す手段として文法的なテンスと語彙的な時間副詞の二種類がある。時間副詞の表現においては、発話時を基準軸とした絶対的なものと、出来事の時を基準軸とした相対的なものが存在する。絶対的な時間副詞は発話時を基準軸とするため、直示的(ダイクティック)なものである。これには「今後」、「明日」、「来週」、「今日」、「今晚」、「昨日」、「昨夜」などがある。一方、相対的な時間副詞は出来事時すなわち発話の内容時を基準軸とするため、直示的(ダイクティック)なものではない。これには「その後」、「翌日」、「翌週」、「その日」、「その夜」、「前日」、「前夜」などがある。形式的には、絶対的時間副詞と相対的時間副詞は分化・対立している。

2.2.2. 仁田 (2002)

仁田 (2002) は文レベルでの日本語の時間副詞を含む副詞全体を記述している。この中で、時間副詞は「時の状況成分」、「時間関係の副詞」、「頻度の副詞」に分類されている。時の状況成分は時点を表す副詞で、テンスに関連した意味を持つ。「時間関係の副詞」は事態の発生、展開、存在の様式を示す。仁田 (2002) はさらに、「時の状況成分」に属する時点を表す副詞を基準軸に基づき、「発話時を基準にする時の成分」、「不定時を基準にする時の成分」、「絶対的時点を示すもの」の3つに分け、それぞれの例を以下のように示している (仁田 2002 : 225-226 に従って筆者が要約)。

「発話時を基準にする時の成分」：今、今日、来週、昨夜、去年、さっきなど。

「不定時を基準にする時の成分」：当日、翌週、前夜、前年など。

「絶対的時点の時の成分」：

- ① 暦法的「直線型」：1980年、紀元4世紀頃、9時ちょうど過ぎなど。
- ② 時節・時間帯「循環型」：朝、晩、午前、午後など。

「発話時を基準にする時の成分」は発話時を基準とするため、工藤 (1995) が定義する絶対的時間副詞に該当する。「不定時を基準にする時の成分」はある特定の時点を基準とし、それとの前後関係を元に、時点を指し示すため、工藤 (1995) の出来事時を基準とする相対的時間副詞に当たる。この二種類の時間副詞は何らかの時点を基準としなければ指示時点が定まらない点においては共通している。一方、「絶対的時点の時の成分」は基本的にある時点との関係においてではなく、それ自体によって指示時点が定まっている。

3. アイヌ語における時点を表す時間副詞

日本語の研究成果である工藤 (1985) と仁田 (2002) を踏まえると、時点を表す時間副詞は「発話時を基準とする時間副詞」、「不定時を基準とする時間副詞」、「絶対的時点の時間副詞」の3つに分類可能である。本稿では、アイヌ語沙流方言における時間副詞をこの分類法

に従って検討し、その有効性を検証していく。

3.1. 発話時を基準とする時間副詞

アイヌ語における発話時を基準とする時間副詞は指示時点により、「発話時を含む時間帯」、「発話時以前」、「発話時以降」を表すものの3つに分類される。まずは発話時を含む時間帯を表す時間副詞について考察していく。

3.1.1. 発話時を含む時間帯を表す時間副詞

アイヌ語では発話時を含む時間帯を指す時間副詞が数多く存在する。「tane (今)」、「tanto (今日)」、「tanukuran (今夜)」、「tan cup (今月)」、「kunneywa (今朝)」、「tanpa (今年)」のように特定の時間帯を指すものから、「tap (今しがた)」、「asinno (最近)」、「uhunak (近頃)」のようにより広範な時間帯を指すものまで様々である³。これらの中で特に頻出している時間副詞例 (1)、例 (2) が示すような「tane (今)」である⁴。

(1) tane k=ókere.

今 1SG.SBJ=終わる

「今 (私は) 終わった。」(田村 1997a : 67)

(2) tane ku=ye na.

今 1SG.SBJ=言う SFP

「今 (私が) 言うよ。」(田村 1997a : 31)

佐藤 (2008 : 185) は「tane」が「今現在」を中心にしつつ、「少し前」や「少し後」をも含む比較的広い範囲の「今」を表すと述べている。例 (1) における「tane (今)」は時間軸上で事態「okere (終わる)」を発話時点より少し前に位置づけ、過去を表している。一方で、例 (2) の「tane」は時間軸上で事態「ye (言う)」を発話時点より少し後に位置づけ、未来を表している。

実は、発話時を含む時間帯を表すこれらの副詞は、その幅広い時間的特性により、発話時の前後を跨ぐことが普通である。この特性により、これらの副詞は文中で動詞と共に使われた際、その動詞が示す事態を過去、現在、未来のいずれの時間でも解釈可能にする。この点は「tanto (今日)」を用いた例 (3) から (5) を通じて見ることができる。

³ 日本語では「今朝」は過去、「今晚」は未来の副詞として理解されることが多いが、仁田 (2002 : 208) が指摘しているように、「けさは、やけに富士がはっきり見えるじゃねえか、…」、「とにかく今晚、夜が更けてから実験してみましよう」の例においては、発話時を含む時間帯の時間副詞として解釈されることがある。本稿はアイヌ語の時間副詞「kunneywa (今朝)」と「tanukuran (今晚)」を分類したとき、この立場を参考にした。

⁴ 本稿では例文を引用する際、アイヌ語の例文においては人称接辞を「=」で、形態素の境界を「-」で示している。日本語の訳文においては句読点の「、」を「,」に統一している。また、本稿では例文にグロスをつける際、次の略語を用いた。1/2/3 : 1 人称/2 人称/3 人称、COP : コピュラ、INDEF : 不定、INCL : 包括、PRF : 完了、SBJ : 主格、SFP : 文末助詞、SG/PL : 単数/複数、OBJ : 目的格、NEG : 否定、PROH : 禁止、TOP : 主題

- (3) a=aktonoke tanto hinak un ø=arpa⁵ wa ø=isam ruwe an?
INDEF=弟殿 今日 どこ へ 3SG.SBJ=行くて 3SG.SBJ=ない の COP
「あなたの弟殿は今日どこへ行ってしまったのですか？」(萱野 2002 : 12) ⁶
- (4) tanto pohene mean⁷.
今日 なおさら 天気が寒い
「今日はなおさら寒い」(萱野 2002 : 32)
- (5) okko tanto ahata=an kusu
お姉さん 今日 ヤブマメを掘る=1SBJ.INCL ため
pikutatoy or un paye=an ro
川原の砂畑 ところ へ 行く.PL=1SBJ.INCL SFP
「お姉さん、今日土豆を掘りに川原の砂畑まで行こうよ。」(萱野 2002 : 27)

例 (3) においては、「tanto (今日)」が示す時間帯は発話時を含むものの、事態「arpa (行く)」は発話時点の前、つまり過去に発生している。例 (4) の事態「mean (天気が寒い)」は発話時点においても該当するので、時間副詞「tanto (今日)」が使われているものの、現在の状態として解釈される。例 (5) では、「paye (行く (複数形))」は発話時点ではまだ起きておらず、従って発話時点以降の未来に発生する事態とされている。

しかし、発話時を含む時間帯を表す時間副詞は、構文的にアイヌ語の「過去・完了」とされる助動詞「a」や「今…してしまった」という意味の助動詞「nisa」などの過去の意味を含意する成分と共に起る場合、その時間副詞が修飾する事態は必ず発話以前に起きたものとして解釈される。一方、アイヌ語の意志と未来を表す「kusu ne (つもり)」などと共起する場合、その時間副詞が修飾する事態は必ず発話時以降に起きたものとして解釈される。例 (6) と例 (7) はこの違いを明確に示している⁸。

⁵ アイヌ語の動詞は義務的に人称が表示される。ただ、3人称の標示はゼロ形態の接辞で表される。本稿では、そのことを見やすくするために3人称接頭辞を「ø=」で表示することにする。また、本稿で引用した例文における称接辞を示す「=」、形態素の境界を示す「-」、グロス、時間副詞と動詞における下線はすべて筆者によるものであり、誤りは全て筆者に帰する。

⁶ 萱野 (2002) と萱野 (2005) の例文はすべてカタカナ表記を採用している。本稿ではそれらの例文を引用する際、萱野 (2002) に載っているカタカナとローマ字表記の対応関係に従い、カタカナ表記をローマ字表記に直している。誤りは全て筆者に帰する。

⁷ mean (天気が寒い) はアイヌ語学においては「完全動詞」と呼ばれている。「完全動詞」には人称接辞が付かない。

⁸ アイヌ語においては、時間副詞、動作継続を表す「kor an」または結果継続を表す「wa an」、過去・完了を表す助動詞「a」の3つが1つの文の中で共起することも可能であるが、本稿は、時間副詞を中心とした論述であるため、時間副詞と助動詞「a」が共起する場合の例だけを取り上げた。「時間副詞+継続形式「kor an/wa an」+助動詞「a」」に、文においてどのような構文的制約および意味変化があるのかは、今後の課題としたい。

- (6) tane ku=ype⁹ a wa.
 今 1SG.SBJ=食事する PRF SFP
 「今（さっき）私は食事をしたよ。」（佐藤 2008 : 185）

- (7) tane ipe=an kusu ne na.
 今 食事する=1PL.SBJ つもり SFP
 「今（すぐ）食事をしようよ。」（佐藤 2008 : 185）

「tane（今）」を用いた例（6）では、過去を含意する助動詞「a」が現れているため、事態「ipe（食事する）」は時間軸上で発話時点より少し前に位置づけられ、過去のものとして解釈される。一方で、例（7）の「tane（今）」は意志と未来を含意する助動詞「kusu ne（つもり）」と共起しているため、事態「ipe」は時間軸上で発話時点より少し後に位置づけられ、未来のものとして解釈される。

また、アイヌ語で発話時を含む時間帯を表す時間副詞は、全てが同じ特性を持つわけではない。例えば「tane」は、発話時以前と以降を表すだけでなく、発話時そのものを示すことも可能である。この機能は、例（8）と例（9）で顕著に示されている。

- (8) tane or un sáp=an kotan ø=ehanke kor ø=an
 今 ところへ行く.PL=1SGJ.INCL 村 3SG.SBJ=近づくて 3SG.SBJ=いる
 「もうそこへ私たちが行く村が近づきつつある。」（田村 1996 : 81）

- (9) tane suy ø=yaykosotkikarkar kor ø=an
 今 また 3SG.SBJ=寝るしたくをするて 3SG.SBJ=いる
 「また（彼は）もはや寝るしたくをしている。」（田村 1996 : 857）

例（8）で使われている「tane」は、発話時点の事態「ehanke（近づく）」に焦点を当て、発話時そのものを指し示している。同様に、例（9）の「tane」も発話時点での事態「yaykosotkikarkar（寝るしたくをする）」に焦点を当て、発話時そのものを指している。このように、「tane」は発話時を超える幅広い時間帯を表すことが可能であり、例（8）と（9）を通じて、発話時点における事態の動的な持続を表現することができる。アイヌ語の動作の継続を示すアスペクト形式「kor an」と共に使われた場合、現在進行形として機能する。

一方で、「tanto（今日）」のような発話時そのものを指す機能を持たない時間副詞は、「kor an」と結びつく際、発話時点における動的な持続を表現することではなく、すでに実現済の継続事態として解釈されることが多い¹⁰。そして、「wa an」という結果の継続を示す形式と

⁹ アイヌ語の音韻規則では、人称接辞「ku=」と自動詞「ipe」が連続する際、「ipe」は「ype」になる。

¹⁰ 筆者が収集した「tanto（今日）」と動作継続の形式「kor an」が共起する5つの例文のうち、4つは既に実現済みの継続事態として解釈できる。未実現の事態を示す例文は1つのみであった。さらに、「tanto pakno（今日まで）」と「kor an」が共起する2つの例文もあり、これらも実現済みの継続事態として解釈される。査読者からの指摘により、これらの解釈はさらに多くの例文を集めて検証する必要があることが明らかになった。この点は今後の研究課題として取り組む予定である。

佐藤 (2008 : 186) によれば、「tap」は「今より少し前」のごく最近に起きた過去の出来事に限定して使用されるとされ、通常、日本語の「たった今」や「今しがた」と翻訳されることが多い。また、「tap」は「tane (今)」、「tanto (今日)」、「numan (昨日)」などの副詞と組み合わせることで、「つい今しがた」「今日～したばかり」「つい昨日」のような意味を表現することができる。例 (12) から明らかなように、「ek (来る)」という事態は発話時よりも前に位置づけられているため、「tap」が未来の意味を持つことは考えられない。

「asinno」は例 (13) では「新しく」と訳されているが、「最近」や「近頃」と解釈される場合もある。この文脈での事態「tuy (切れる)」は発話時よりも前の事態として理解され、未来の意味に解釈されることはできない。同様に、「uhunak (このごろ)」は発話時と重なるものの、例 (14) での「sirmeman (天気が涼しくなる)」という変化は過去の事態であり、未来の事態として解釈されることはない。

3.1.2. 発話時以前を表す時間副詞

次に、アイヌ語で発話時以前を表す時間副詞に注目する。このカテゴリーには「esir (さっき)」、「numan (昨日)」、「ukuran (昨夜)」、「hoski an to (一昨日)」、「hoski ukuran (一昨夜)」、「hoski an numan (一昨昨日)」、「hoski cup (先月)」、「sakne (去年の夏)」、「hoski sankne (一昨年夏)」、「teeta (昔)」、「toophoski (ずっと以前)」などが含まれる。これらの副詞は、例 (15) から例 (17) で示すように明確に過去の時点を指し示す。

- (15) esir eawne k=arpa akusu awun unarpe
 先程 隣へ 1SG.SBJ=行く したら 隣の おばさん
 ø=isitayki ø=koarikiki kor ø=an a wa.
 3SG.SBJ=機を織る 3SG.SBJ=に精を出す ながら 3SG.SBJ=いる PRF SFP
 「先程私が隣に行ったら隣のおばさんは機織りに精を出していたよ。」(萱野 2002 : 54)

- (16) numan cise ø=huraye apto ø=as
 昨日 家 3SG.SBJ=を洗う 雨 3SG.SBJ=降る
 「昨日、家洗いの雨が降った。」(萱野 2002 : 392)

- (17) teeta tan uske ta yaykoan huci ø=an
 昔 この ところに 独り者 おばあさん 3SG.SBJ=いる
 pe ne a korka tane cise kot patek ø=an
 もの COP PRF けれど 今 家 跡 だけ 3SG.SBJ=ある
 「ずっと前にこの場所で独り者のおばあさんが住んでいたものであったが、今は家の跡しかない。」(萱野 2002 : 241)

例 (15) において「esir (さっき)」は、事態「arpa (行く)」を時間軸上で発話時の前に位置づけ、過去を指し示している。また、「esir (さっき)」は従属節の事態だけではなく、主

節の事態「koarikiki (に精を出す)」を修飾し、動作継続を表す「kor an」までをそのスコープに含んでいると考えられる。これは「esir (さっき)」が時点を示す副詞であると同時に、ある程度の幅を持つ時間副詞であることを示唆している。

一方、例 (16) の「numan (昨日)」と例 (17) の「teeta (昔)」は、「esir (さっき)」と同様に、それぞれの事態「as (降る)」、「an (いる)」を発話時の前に位置づけている。例 (15) の「esir (さっき)」と異なり、これらの副詞は動作継続「kor an」と共起していないが、それぞれの事態に対してある程度の時間的な幅を提供するものと考えられる。従って、例 (15) から (17) における事態は、経験や経歴としての側面を持っていると解釈される。

3.1.3. 発話時以降を表す時間副詞

次に、アイヌ語の発話時以降を示す時間副詞に焦点を当てる。このカテゴリーには「nisatta (明日)」、「niassta onuman (明日の夜)」、「oyasim (明後日)」、「oyapa (来年)」、「oyapa paykar (来年の春)」、「oyapa sak (来年の夏)」などが含まれており、これらはいずれも未来の時間帯を指し示す。例 (18) と例 (19) はこの点を示す例文である。

- (18) ekasi ø=mosirhoppa yak a=ye kusu nisatta a=etusirkar
おじさん 3SG.SBJ=死ぬ と INDEF=言う ので 明日 INDEF=を墓に埋める
「おじさんが亡くなったので、明日葬式をする。」(萱野 2002 : 8)

- (19) nisatta aoka ka ekimne=an hi?
明日 INDEF も 山へ行く=INDEF か
「明日はあなたも山へ行くのですか？」(萱野 2002 : 10)

例 (18) と例 (19) における「nisatta (明日)」は、それぞれ事態「aetusirkar (葬式をする)」と「ekimne (山へ行く)」を時間軸上で発話時以降、すなわち未来に位置づけている。これにより、これらの事態は未来に発生するものとして捉えられるため、テンスとしての未来を表すと解釈できる。このような時間副詞は命令や禁止の表現との共起が可能で、未来の行為に対する指示や指令を伝える際にも用いられる。例 (20) と例 (21) はこの点を示す例文である。

- (20) nisatta, ø=aynuhunara kusu, e=apkas
明日 3SG.SBJ=人捜しする ので 2SG.SBJ=歩く
easirki p ne na
しなければならない もの COP SFP
「明日、人さがしに出かけなければいけないよ」(田村 1997b : 62)

- (21) iteki a=kor son nisatta anakne iteki e=cis pe ne na.
PROH 1SG.SBJ=持つ 息子 明日 TOP PROH 2SG.SBJ=泣く もの COP SFP
「息子よ、明日は決して泣くのではないよ。」(国立国語研究所 2016-2021 : 「アイヌ語

例 (20) は命令文であり、話者が聞き手に対して発話時以降における特定の行動を要求している。この文脈では、未来を指す時間副詞「nisatta (明日)」が使用されており、命令形と共起している。一方、例 (21) は禁止を意味する否定文で、発話時以降の聞き手の行動を禁止している。ここでも「nisatta (明日)」は用いられており、未来の行動に関する禁止を示すために問題なく機能している。

3.2. 不定時を基準とする時間副詞

日本語の研究成果を参照すると、不定時を基準とする時間副詞を検討するとき、それらを「不定時を含む時間帯」、「不定時以前」、「不定時以降」を表すものの3つに分類することができる。これらは特定の日時を示さず、ある期間や相対的な時点を指し示す。これらの副詞は、時間軸上のある一点ではなく、より広い時間帯を捉えるためにも用いられる。以下、この分類に沿ってそれぞれの種類を具体的に見ていく。

3.2.1. 不定時を含む時間帯を表す時間副詞

不定時を含む時間帯を表す時間副詞として、アイヌ語には「ekarino/koekarino (その時)」、「ne etoho (その日)」、「ne ancikarihi/ne ancikari (その夜のうち)」、「ne onuman (その夜)」、「ne tokap (ある日の昼間)」、「ne sirkunneywa (その夜の明け方)」、「ne epaha (その年)」、「sine an ta (ある時)」、「sine an kunneywa (ある朝)」、「sine an to (ある日)」、「sine an paykar (ある春)」、「sine an pa (ある年)」などが存在する。これらの時間副詞は「ekarino/koekarino (その時)」を除き、例 (22) と例 (23) で示されている「連体詞 ne/nea+時間名詞 (または所属形)」によって形成されるものと、例 (24) と例 (25) で示されている「sine an+時間名詞」によって形成されるものの二種類に大別される。

- (22) *néa maratto anak puyar kari a=ahúnte ruwe ne híne,*
 あの 熊の頭 TOP 窓 から 1SG.SBJ=入れる の COP て
ne ancikari, maratto ø=an ruwe ne
 その晩 酒宴 3SG.SBJ=ある の COP
 「あの熊の頭は窓から入れて、その晩は熊送りをしました。」(田村 1989 : 20-21)

- (23) *ne etoho, ne *Ota sekor a=ye *kakko or ta*
 その日 その 太田 という INDEF=いう 学校 ところに
nepki=as kus paye=as hi ta,
 働く=1PL.SBJ ので 行く.PL=1PL.SBJ とき に
 「その日にその太田という学校で仕事をするために行ったときに」(東京外国語大学
 アジア・アフリカ言語文化研究所 2014-2019 : AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト
 「川上まつ子さん口演・浜田隆史聞き起こし・訳注 : isoytak イソイタク 独話 2」:

33-35) ¹¹

- (24) sine ø=an to, apaotki ø=moymoyke.
 一つの 3SG.SBJ=ある 日 戸口のすだれ 3SG.SBJ=動く
 「ある日、戸口のすだれが動きました。」(田村 1988 : 58-59)

- (25) sine ø=an pa ta suy,
 一つの 3SG.SBJ=ある 年 に また
 ø=tuyma kucacise or ta, arpa=an
 3SG.SBJ=遠い 狩小屋 ところ に 行く=1SG.SBJ
 「ある年また、遠いところの狩小屋へ行きました。」(田村 1989 : 28-29)

例 (22) では「maratto an (熊送りの宴が開催される)」が過去のある時点に起きた事態である。その事態が基準時として設定されたため、「ne ancikari (その晩)」はその基準時を含む時間帯を指し示す時間副詞として機能している。同様に、例 (23) では「paye (行く (複数形))」が過去の事態である。「ne etoho (その日)」はその事態を基準時とし、基準時を含む時間帯を示している。

例 (24) と例 (25) における事態「moymoyke (動く)」と「arpa (行く)」も過去に起きた事態であるため、それぞれの文に現れる「sine an to (ある日)」と「sine an pa (ある年)」はそれぞれの事態を基準時として、その基準時を含む時間帯を表している。

以上の例はすべて不定時を含む時間帯を指す時間副詞が過去のある時点を基準時としたものであるが、この種類の時間副詞の一部は例 (26) と例 (27) で示すように未来のある時点を基準に取る用法もある。

- (26) nea p sake nep ueunno nusa kes ta a=anu kor
 その もの 酒 何 沢山 祭壇 端 に 1SG.SBJ=置くと
ne ancikari ø=isam
 その晩 3SG.SBJ=ない
 「その酒の材料をたくさん祭壇の端に供えたと、その晩にはなくなってしまう。」(平取町立二風谷アイヌ文化博物館 2013-2015 : 「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」 報告書 20-4 : 144-145)

- (27) tanto nipes ku=kep wa k=ek. ne etoho woro a=o kor
 今日 シナ皮 1SG.SBJ=剥ぐて 1SG.SBJ=来る その日 水に INDEF=入れる と
pirkano ø=on pe ne kusu tane sisirkunne korka
 よく 3SG.SBJ=発酵する もの COP ので 今 薄暗くなる けれど

¹¹ 例 (23) で示された例文において、アスタリスク「*」でマークされている語は、日本語からの借用語だと考えられる。このマークは、録音テキストを聞き起こした研究者が、その語が元々日本語であることを示唆するために使用していると推測される。

to or pakno k=arpa wa k=ek
 沼 ところ まで 1SG.SBJ=行く て 1SG.SBJ=来る

「今日シナ皮を剥いで来た。その日に水に漬けるとよく発酵するものだから、もう薄暗くなっただけで沼まで行って来る。」(萱野 2002 : 226)

例 (26) は昔話の中の一文中で、発話時点よりも過去の事態であるが、田村 (1997a : 51) によると、沙流方言においては、過去の出来事を叙述する文脈では条件を表す接続助詞「kor」を使用しないと指摘している。そのため、「kor」が用いられている例 (26) は時間を特定しない慣習的な事態として理解することができる。そうすると、「ne ancikari (その晩)」は過去の時間帯だけではなく、未来の時間帯として解釈されることも可能だろう。

例 (27) における「ne etoho (その日)」は、発話時の「tanto (今日)」よりも後に位置づけられる、未来の事態「on (発酵する)」を指し示しているため、未来の時間帯を表す副詞として機能している。例 (22)、(23) と例 (26)、(27) からわかるように、「ne ancikari (その晩)」と「ne etoho (その日)」は過去にも未来にも用いられることができ、これらは不定時を基準にした時間副詞だと言える。

なお、本稿で収集した例文では、「sine an+時間名詞」によって形成される時間帯を表す時間副詞は、例 (24) と例 (25) で示されているように、過去の意味に用いられるものしか存在しない。これらの時間副詞は第 3.1.1 節で議論した、発話時を含む時間帯を表す時間副詞における「過去」しか表せないものと同じ性格を持っており、基準時以前しか表せない可能性があるが、基準時以降にも使用できるかどうかについては、継続的な研究が求められる。

3.2.2. 不定時以前を表す時間副詞

不定時以前を表す時間副詞に関して、収集された例では「ne etoko (その前)」、「etoko un to (前の日)」、「hoski pa (前の年)」などが存在する。例 (28) と例 (29) はそれぞれ「ne etoko (その前)」と「hoski pa (前の年)」の例である。

(28) tane isam=an kusu ne etoko ta yayecitakte

今 いない=1SG.SBJ ので その前 に 告白する

a=ki ayne onne=an pe ne akusu a=ye sektor

1SG.SBJ=する あげく 死ぬ=1SG.SBJ もの COP ので 1SG.SBJ=言う と

「もう今は死んでいくので、その前に自分についての話を寿命がくるものなので言い遺しておくのだ、と。」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2014-2019: AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト「川上まつ子さん口演・石井正樹聞き起こし・訳注 : uwepeker ウウェペケレ民話 18」: 440-441)

(29) hoski pa ta ø=an porowakka kusukeray hene ya kupita toy

前の年 に 3SG.SBJ=ある 洪水 おかげで でも か 中洲 畑

ø=pirka poronno munciro k=etoya wa k=ek ruwe ne wa

3SG.SBJ=良い たくさん アワ 1SG.SBJ=蒔く て 1SG.SBJ=来る の COP SFP

「前の年にあった洪水のお陰だろうか 中洲畑がよくてたくさんアワを蒔いてきたのだよ。」(萱野 2002 : 218)

例 (28) では基準時が「*isam* (ない)」に設定され、事態「*yayecitakte* (告白する)」は時間軸上で基準時以前のこととして理解される。そのため、「*ne etoko* (その前)」は不定時以前を表すと解釈される。例 (29) における基準時は事態「*etoyta* (蒔く)」に設定され、「*hoski pa* (前の年)」はその基準時よりも前の時点を指しているため、不定時以前を表す時間副詞として解釈される。

3.2.3. 「不定時以降」を表す時間副詞

「不定時以降」を示すアイヌ語の時間副詞には、「*isimne/isimketo/isimneto/isimne hike/isimne an* (翌日)」¹²、「*iyoya to* (そのあくる日)」、「*ioya*¹³ *ancikar* (次の晩)」、「*eoyapa* (翌年)」、「*okake/imakake* (その後)」などが含まれる。これらは、例 (30) から (34) で示すように基準時の後に起こる事態や期間を指し示すために用いられる。

- (30) *tapanpe neno* \emptyset =*apemerimer* *isimne* *anakne*
 これ のように 3SG.SBJ=火花が飛び散る 翌日 TOP
 \emptyset =*pirka* *yanto* \emptyset =*ek* *pe* *ne* *wa*
 3SG.SBJ=良い 客 3SG.SBJ=来る もの COP SFP
 「このように火花が飛び散った翌日はいいお客が来るものだよ。」(萱野 2002 : 33)

- (31) \emptyset =*poro* *wakka* \emptyset =*an* *eoyapa* *anakne*
 3SG.SBJ=大きい 水 3SG.SBJ=ある 次の年 TOP
pikutatoy sino \emptyset =*pirka* *p* *ne*
 川洲畑 本当に 3SG.SBJ=良いもの COP
 「大洪水のあった次の年は川洲畑は本当にいいものだ。」(萱野 2002 : 383)

- (32) *okake ta*, *a=kor* *kotan-kor-nispa*, *a=ocihi* \emptyset =*pita-pita*
 その後に 1SG.SBJ=持つ 村-持つ-長 1SG.SBJ=の棺蓋 3SG.SBJ=ほどく-ほどく
híne, oro wa *úse* *i=anu* *híne ora*, \emptyset =*itak*
 て そこから 離れて 1SG.OBJ=取り出す て から 3SG.SBJ=言う
hawe ene \emptyset =*an* *hi*
 音 このように 3SG.SBJ=ある の
 「そのあとで、村長さんは、私の棺蓋をほどいて、その中から私を出して、こう言いました。」(田村 1985 : 4-5)

¹² 「*isimne*」と「*isimne hike*」という副詞は、査読者からの貴重なご提案により、本稿に追加された。この点に関して、査読者に心からの感謝を申し上げます。

¹³ 「*ioya*」と「*iyoya*」は研究者によって表記が異なるものの、同じ意味を表す。「*iyoya*」の一番目の「y」は挿入音とされる。

- (33) hoski arpa wa ipe kor an¹⁴ okaketa k=arpa kus ne na
 先に行く て 食事する ている その後 1SG.SBJ=行く つもり SFP
 「先に行って食べていてくれ、後で私は行くから。」(萱野 2002 : 167)

例 (30) と例 (31) では基準点が明確でなく、発話時の前後どちらにも当てはまり得る状況が示されている。この柔軟性により、基準点を過去にも未来にも置くことが可能である。そのため、例 (30) における「isimne (翌日)」と例 (31) における「eyapa (次の年)」は不定時を基準とする時間副詞として機能すると考えられる。

例 (32) においては基準点が過去に設定されており、一連の事態「pita (ほどく)」、「use anu (取り出す)」、「itak (言う)」はその基準点の後に起こる。ここで「okaketa (その後)」は基準点以降の事態を指し示している。例 (33) では基準点が未来に設定されており、事態「ipa (食事する)」は基準点の後に位置づけられている。この場合、「okaketa (その後)」はその後に続く事態「arpa (行く)」を示しており、基準点以降の時間を表す副詞として機能している。このように、「okaketa (その後)」は過去と未来の両方で用いられることが確認されるため、不定時以降の時間副詞としての使用が適切であると言える。

さらに、不定時以降を基準時とする時間副詞の中には、日本語の「いつか、いつの日か」に相当する不確定の不定時を表すものもある。例 (34) と例 (35) はその例文である¹⁵。

- (34) ney ta ka paye=an wa inkar=an kunak
 いつにも行く.PL=1SG.SBJ て 見る=1SG.SBJ と
a=ramu kor an=an pe ne akusu
 1SG.SBJ=思う て いる=1SG.SBJ もの COP ので
 「いつの日か行ってみたいとばかり考えていたものでした。」(萱野 1998 : 82-83)

- (35) ney ta ka KURUMA ani mosir epitta payoka=an wa inkar=an ro.
 いつにも車 で 国 中 行く.PL=1PL.SBJ て 見る=1PL.SBJ SFP
 「いつか車で国中を回ってみましょう。」(本田 2001 : 19) ¹⁶

例 (34) の基準時は主節の事態「ramu (考える)」に置かれている。時間副詞「ney ta ka」が修飾する事態「paye (行く (複数形))」は事態「ramu (考える)」の基準時以降になっているため、この例文の「ney ta ka」は基準時以降を表す時間副詞として理解される。例 (35) の基準時は発話現在になっている。事態「payoka (行く (複数形))」は発話時点以降、未来に起きる事態であるため、時間副詞「ney ta ka」は基準時以降を表すと解釈される。

¹⁴ アイヌ語の命令文では、主格人称接辞のつかない形で動詞を用いる。(田村 1997a : 74)

¹⁵ 「ney ta」は国立アイヌ民族博物館の深澤美香氏に教示していただいたものである。ご教示に深く感謝を申し上げます。

¹⁶ 例 (35) の例文における大文字「KURUMA」は、日本語からの借用語だと考えられる。大文字で書かれているのは、録音テキストを聞き起こした研究者が、その語が元々日本語であることを示唆するために使用していると推測される。

3.3. 絶対的時点の時間副詞

絶対的時点を表す時間副詞は、その指示する時点が発話時であるか特定の時点であるかによって、その前後関係が決まるものではない。基本的にその副詞自体は指示時点を確定的に示している。つまり、その時間副詞は、時間軸における位置が決まっているということである。逆にそれらの時間副詞が指している時点は過去なのか、現在なのか、未来なのか、それ自体では決まらず、発話時が時間軸上のいつに当たるのかによって決まる。日本語において、この種の時間副詞には時間軸上に位置付けられる暦法的な時間帯や、定期的に繰り返される時節・時間帯を示す副詞の二種類が存在する。しかし、アイヌ語における暦法に基づく時間副詞¹⁷は、筆者が収集したデータの中では日本語から借用されたと考えられる例が見られるが、その数は非常に少ない。例 (36) はその一例である。

- (36) easir, sísam itak ani a=ye yakun, tapan, sōwa ciwninen,
 それこそ 和人 言葉 で INDEF=言う なら この 昭和十二年
 rokugaci niciwninici tóho ta, ekuskonna, sirkunne.
 六月二十二日 の日 に 突然 暗くなる
 「まあ、日本語で言えば、この、昭和十二年、六月二十二日の日に、突然、暗くなった。」(田村 1984 : 46-47)

例 (36) にある「sowa ciwninen rokugaci niciwninici tóho (昭和十二年六月二十二日の日)」は、特定の日付を指す暦法的時間副詞であり、時間軸上の確定した時点を示している。この場合、指示されている時点は発話時から見て過去に位置している。

しかし、暦法において月を明確に区切るのとは異なり、アイヌ語には季節の変化を示す時間表現が存在する。これには「aropaykarus (春先、3月か4月の初め頃)」、「sino paykar (盛春、4月から5月いっぱい)」、「paykar opicino (春の終わり、6月か7月)」、「sakatpa (初夏、6月から7月の初め)」、「saknoski (盛夏、7月半ばから8月)」、「arhucuk (秋の初め)」、「cukkes (晩秋、12月頃)」などが含まれる。例 (37) と例 (38) はそれぞれ「paykar opicino (春の終わり、6月か7月)」と「arhucuk (秋の初め)」の例文である。

- (37) paykar opicino kímí k=étoyta akus
 春の終わり トウモロコシ 1SG.SBJ=に蒔く ので
 na k=e eaykap
 まだ 1SG.SBJ=食べる できない
 「春の終わりにトウモロコシをまいたところまだ食べられない。」(田村 1996 : 518)

¹⁷ 田村 (1996 : 67) によると、アイヌ語には1月から12月までの各月を指す表現が存在するとされる。それぞれ「towetanne (1月)、kuwekay (2月)、kiwtacup (3月)、mocup (4月)、sincicup (5月)、mawtacup (6月)、mawcicup (7月)、haprap (8月)、nihorak (9月)、urepok (10月)、ruwekaricup (11月)、curup (12月)」になっている。これらの言い方はアイヌ語の伝統的な月の呼称だと考えられるが、筆者が収集したデータにはこれらを用いた具体的な例は見つからなかったため、ここでは議論を控えることとする。

- (38) tane arhucuk mean rápok ne p ne kusu,
 もう 秋口 天気が寒い 時期 COP もの COP ので
 a=mipa p ø=rupus ø=rupus kane,
 INDEF=着る.PL もの 3SG.SBJ=凍る 3SG.SBJ=凍る ほど

「もう秋口で、寒い時期ですから、着ている物がバリバリ凍って」(田村 1988:76-77)

例 (37) に登場する時間副詞「paykar opicino (春の終わり、6月か7月)」は、文脈から考えて、時間軸上で発話時以前に位置している。そのため、この副詞が修飾する事態「étoyta (蒔く)」は過去のことである。例 (38) の「arhucuk (秋の初め)」は文脈から考えて、時間軸上で発話時現在と重なっているため、この副詞が修飾する事態「mean (天気が寒い)」は現在のことである。

アイヌ語では、このような定期的に繰り返される時節を指す表現は他にも多数存在する。例えば、「kunneywa (朝)」、「onuman (晩、夕方)」、「tokes (夕方、日暮れどき)」、「tokapipe etok ta (午前)」、「tokapipe oka ta (午後)」、「tokap noski (昼)」、「anontom (夜中)」、「paykar (春)」、「cuk (秋)」、「asirpa (正月)」、「inomito/inunuketo (元日)」、「ihokto (正月二日)」などがこれに該当する。例 (39) から (41) はそれぞれ「kunneywa (朝)」、「onuman (晩、夕方)」と「asirpa (正月)」を含む例文である。

- (39) a=oyamokte wa, ora kunneywa pet or ta ran=an wa,
 1SG.SBJ=不思議に思う て から 朝 川 ところに 下る=1SG.SBJ て
 inkar=an kor, nerok cip a=sirkote ya
 見る=1SG.SBJ て あの 舟 1SG.SBJ=を繋ぐか
 hi neno ø=oka wa ø=oka.
 時 そのまま 1PL.SBJ=ある.PL て 1PL.SBJ=ある.PL

「ふしぎに思って、朝、川へ下りて行って見ると、あの二つの舟は、わたしが、杭につないだときのままになっていました。」(萱野 2005 : 140-141)

- (40) k=éramucuptek korka onuman k=útari ø=sap nankor
 1SG.SBJ=心細い けれど 夕方 1SG.SBJ=の仲間 3PL.SBJ=下る.PL だろう
 「心細いけれど夕方には家の人たちが (川上の方から) 帰って来るでしょう。」(田村 1996 : 115)

- (41) asirpa or ta uwerankarap=an pe ne na
 正月 ところに 挨拶しあう=INDEF もの COP SFP

「新しい年 (正月) にご挨拶をするものですよ。」(萱野 2002 : 17-18)

「kunneywa (朝)」は一般的に発話時をまたぐと解釈されることが可能であるが、例 (39) では事態「ran (下る)」が時間軸上で発話時より前のことであるため、ここでは「kunneywa (朝)」は過去を指し示している。例 (40) では「onuma (夕方)」が修飾する事態「sap (下

る)」が発話時以降になっているため、この副詞は未来を指し示している。例(41)の時間副詞「asirpa(正月)」に対しては、発話時が時間軸のどこに位置付けられているのかが不明であり、かつこの副詞は時間軸上で循環するものであるため、「asirpa(正月)」が修飾する事態「uwerankarap(挨拶しあう)」が過去にあるのか、未来にあるのかは判断不能となる。

従って、例(37)から(41)のような、時間軸で一定の間隔をおいて繰り返し現れる時間副詞は発話時の時間軸における位置が明確になって初めて、それらの時間副詞が指し示す時点が過去にあるのか、現在にあるのか、未来にあるのかが決まる。

4. まとめと課題

本稿では、日本語の時間副詞の研究成果を参照しつつ、意味に従ってアイヌ語のテンス的な「過去、現在、未来」を表す時間副詞に対する分析・記述を行った。

アイヌ語の時点を表す時間副詞には、「発話時を基準とする時間副詞」、「不定時を基準とする時間副詞」、「絶対的時点の時間副詞」の三種類が存在する。まず、「発話時を基準とする時間副詞」には、発話時を含む時間帯を指すもの、発話時以前を表すもの、発話時以降を表すものがある。発話時を含む時間帯を指す時間副詞には、「過去、現在、未来」の3つの意味を表せるものと、「過去、現在」の2つの意味しか表せないものがある。発話時以前を表す時間副詞は経歴と経験を表すことが多く、発話時以降を表す時間副詞は命令と禁止と共起することが多い。そして、「不定時を基準とする時間副詞」はさらに「不定時を含む時間帯」、「不定時以前」、「不定時以降」を表す時間副詞に分けられる。不定時を含む時間帯を指す時間副詞には「過去、現在、未来」を表せるものと、「過去、現在」を表せるものがある。また、「絶対的時点の時間副詞」については、日本語のような暦法的な副詞は少ないが、時間軸で一定の間隔をおいて繰り返し現れる時間副詞は数多く存在する。これらの時間副詞が指している時点が過去なのか、現在なのか、未来なのかは、それ自体では決まらず、発話時が時間軸上のいつに当たるのかによって決まる。

これらの時間副詞は、概して1つの体系を構築していると考えられるが、アイヌ語の例が制限されているため、一部の時間副詞についてはさらなる詳細な検証が必要である。また、紙面の都合上、本稿では事態の継続や発生の時間的な量や、事態の進展を表す時間副詞と頻度を表す時間副詞については記述できなかった。いずれも今後の課題としたい。

参考文献：

平取町立二風谷アイヌ文化博物館(2013-2015)「アイヌ語の保存・継承に必要なアーカイブ化に関する調査研究事業」報告書 <http://www.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/nibutani/culture/language/story/> [2023年12月アクセス].

知里真志保(1973/1954)「アイヌの神謡」(『知里真志保著作集』1.153-222. 東京：平凡社 所収)

Comrie, Bernard (1985) *Tense*. Cambridge: Cambridge University Press.

服部四郎(1964)『アイヌ語方言辞典』東京：岩波書店.

本田優子(2001)「川上まつ子アイヌ語文例集」『アイヌ民族博物館研究報告』7. 9-76.

萱野茂(1998)『萱野茂のアイヌ神話集成 第4巻 ウウエペケレ編 I』東京：ビクター

エンタテインメント株式会社.

萱野茂 (2002) 『萱野茂のアイヌ語辞典 (増補版)』 東京: 三省堂.

萱野茂 (2005) 『新訂復刻 ウウエペケレ集大成』 東京: 日本伝統文化振興財団.

国立国語研究所 (2016-2021) 「アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロス付き—」

<https://ainu.ninjal.ac.jp/folklore/> [2023年12月アクセス].

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』 東京: くろしお出版.

中川裕 (2013) 『ニューエクスプレス アイヌ語』 東京: 白水社.

仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』 東京: くろしお出版.

佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京: 大学書林.

嶋田珠巳 (2021) 「「時間と言語」に関する基礎的考察」 嶋田珠巳・鍛冶広真 (編) 『時間と言語』 1-23. 東京: 三省堂.

田村雅史 (2003) 「アイヌ語におけるアスペクトに関する従来の記述の概観」 『itahcara (イタハチャラ)』 1: 17-24.

田村すず子 (1984) 『アイヌ語音声資料 1』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料 2』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 (1988) 『アイヌ語音声資料 5』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料 6』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京: 草風館.

田村すず子 (1997a) 「アイヌ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典コレクション: 日本列島の言語』 1-88. 東京: 三省堂.

田村すず子 (1997b) 『アイヌ語音声資料 10』 東京: 早稲田大学語学教育研究所.

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (2014-2019) 「AA 研アイヌ語資料公開プロジェクト」 <https://ainugo.aa-ken.jp/> [2023年12月アクセス].

Temporal Adverbs in Ainu Language Representing Points in Time

Changcheng MA
(Hokkaido University / Yantai University)

Keywords: Ainu language, temporal adverbs, time of utterance, indefinite time, absolute time

In Ainu language, there are three types of temporal adverbs that indicate points in time: temporal adverbs based on the time of utterance, temporal adverbs based on an indefinite time, and temporal adverbs of absolute time points. First, temporal adverbs based on the time of utterance include those that refer to a time period including the time of utterance, those that indicate a time before the utterance, and those that indicate a time after the utterance. Temporal adverbs referring to a time period including the time of utterance can express three meanings: past, present, and future; or two meanings: past and present. Temporal adverbs indicating a time before the utterance often express career and experience, while those indicating a time after the utterance often co-occur with commands and prohibitions. Next, temporal adverbs based on an indefinite time are further divided into those that indicate a time period including an indefinite time, before an indefinite time, and after an indefinite time. Temporal adverbs indicating a time period including an indefinite time can express either three meanings: past, present, and future; or two meanings: past and present. Finally, regarding temporal adverbs of absolute time points, while there are fewer calendar-like adverbs as in Japanese, there are many that repeatedly appear at fixed intervals on the time axis. Whether these temporal adverbs indicate the past, present, or future is not determined by themselves, but depends on where the time of utterance falls on the time axis.

(ま・ちょうじょう machangcheng168@gmail.com)